

第49回 高知女子大学看護学会



日 時 : 令和5年7月22日(土) 10:00~16:00

場 所 : 高知県立大学 池キャンパス、オンライン

主催 : 高知女子大学看護学会

共催 : 高知県立大学看護学部同窓会・高知県立大学

後援 : NHK 高知放送局、高知新聞社、RKC 高知放送、KUTV テレビ高知、
KSS さんさんテレビ、エフエム高知

学会長 あいさつ

第49回高知女子大学看護学会は、昨年度に引き続き『看護におけるイノベーションの創出』というメインテーマの下、初めて、対面とオンラインを併用した形式で開催することになりました。ここ数年多くの学会で取り入れられたオンラインやハイブリッド形式での開催は、学術的な学びの場に遠隔地にいながら参加できるという画期的なものであり、新型コロナウイルス感染症のパンデミックという社会的苦境がもたらしたイノベーションの一つといえます。

近年、私たちの生活や保健医療の場では、さまざまな変革が起こっています。デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進や人工知能（AI）の発達、常識を一変させるような新しい価値や考え方の創造などにより、研究開発のあり方は大きく変容し、10年前には想像の域を出なかったことが現実化しています。一方で、加速度的に生み出される新しい技術とどのように付き合っていくか、どのように活用していくかが課題にもなっています。

イノベーションは、新しいアイデアから新たなものを生み出すだけでなく、それにより社会的意義のある新たな価値の創造や社会的な変化をもたらすことが重要です。看護イノベーションの創出においては、保健医療に関するニーズや課題を看護の視点をもって見極めること、人々の健康や安寧に資するという根源的な目的を見失わないこと、革新がもたらす影響にまで目を向けることなどが必要であるといえます。

今回は、東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 教授の福井小紀子先生を講師にお迎えして、「社会のニーズに応える看護イノベーションの挑戦」というテーマでご講演いただくことになりました。福井先生は、これからの社会の変化や医療介護提供体制の変革も踏まえ、“DX”、“ビッグデータ”、“個別ケア”、“連携・教育”などをキーワードに、現場のケアの質向上やケアの受け手の直接的利益につながるさまざまな研究を精力的にされています。社会のニーズに応える看護のイノベーションをいかにして創出していくか、看護職だからこそ起こせるイノベーションとは何かなどを考える機会になることと思います。

また、午後からは、看護におけるイノベーションの実践例を取り上げた6つのワークショップを開催します。社会的課題であるヤングケアラーへの支援、変化する医療現場で専門性を発揮する看護職、他の学問分野に越境して挑戦する新たな看護研究方法、ソリューション導入で挑む学習者主体の看護教育、小さなアイデアから始まる療養生活を支えるケアツール開発、キャリア形成における自分イノベーションを取り上げます。さまざまな場で行われているイノベーションの挑戦は、皆様にも新たな挑戦をする勇気と刺激を与えてくれることでしょう。

高知女子大学看護学会は、これからも会員の皆様、地域の看護職の皆様、そして社会のニーズに応えるべく、活動の充実に努めてまいります。どうか温かく見守っていただきますよう、お願い申し上げます。

令和5年7月
高知女子大学看護学会
学会長 野嶋佐由美

学会 プログラム

7月22日(土)

10:00～ 開会の辞

学会長あいさつ

高知県立大学看護学部 学部長あいさつ

高知県立大学看護学部同窓会 会長あいさつ

10:15～ 講演

於 共用棟 2F 大講義室

「社会のニーズに応える看護イノベーションの挑戦」

講師：福井 小紀子

(東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

研究科長/在宅・緩和ケア看護学分野 教授)

座長：中野 綾美

(高知県立大学看護学部 教授)

12:15～ 学会総会

13:30～ ワークショップ

15:15～ ワークショップまとめ

■ワークショップ1 於 看護福祉棟 2F F208
社会的課題への看護職の挑戦ーヤングケアラーの支援ー

話題提供者：岩井 由里（高知県立幡多農業高等学校 養護教諭）
西内 章（高知県立大学社会福祉学部 教授）
森下 幸子（高知県立大学看護学部 准教授）
コーディネーター：森下 幸子（高知県立大学看護学部 准教授/ヤングケアラープロジェクト
チームリーダー）

■ワークショップ2 於 看護福祉棟 2F F206
変化する医療現場で専門性を発揮する看護職の挑戦

話題提供者：宮脇 聡子（四国がんセンター がん看護専門看護師）
大森 康之（高知医療センター 救急外来・中央診療 看護副科長）
コーディネーター：豊田 邦江（高知県立大学看護学部 特任講師）

■ワークショップ3 於 看護学部棟 2F C220
越境する研究者が切り開く新たな看護研究方法の可能性

話題提供者：小林 秀行（高知県立大学看護学部 准教授）
岩本 幸大（京都大学大学院 情報学研究科社会情報学コース医療情報学
講座 博士後期課程）
コーディネーター：畦地 博子（高知県立大学看護学部 教授）

■ワークショップ4 於 看護学部棟 3F C314
ソリューション導入で実現する学習者主体の看護教育

話題提供者：大川 宣容（高知県立大学看護学部 教授）
嶋岡 暢希（高知県立大学看護学部 准教授）
コーディネーター：長戸 和子（高知県立大学看護学部 教授）
森本 紗磨美（高知県立大学看護学部 助教）

■ワークショップ5 於 看護学部棟 3F C310
“あったらいいな”から始まる療養生活を支えるケアツール開発

話題提供者：山本 典子（株式会社メディディア医療デザイン研究所 代表取締役）
中井 寿雄（高知県立大学看護学部 准教授）
コーディネーター：瓜生 浩子（高知県立大学看護学部 教授）

■ワークショップ6 於 看護学部棟 3F C309
キャリア形成における自分イノベーション

話題提供者：坂口 結映（高知県立大学大学院 看護学研究科 博士前期課程）
中村 夏子（高知大学医学部附属病院 次世代医療創造センター）
竹崎 陽子（高知医療センター）
松澤 大二郎（高知市保健所 健康増進課）
コーディネーター：田井 雅子（高知県立大学看護学部 教授）

講演 要旨

社会のニーズに応える看護イノベーションの挑戦

講師：福井 小紀子

東京医科歯科大学 大学院保健衛生学研究科
研究科長／在宅・緩和ケア看護学分野 教授

本講演では以下の3つに分けてお話ししたい。

まず、近年の社会課題の変化とそれを受けた政策的対応について。ポイントは、この10年間に着目され強化されてきた団塊の世代が75歳になり高齢多死社会が課題となる2025年問題とその対応から、直近では、団塊ジュニア世代が70歳を超えて現役世代の減少が顕著になる2040年問題に課題と対策が大きくシフトチェンジしていることである。加えて、科学技術が世界的に急速に進歩するなか、医療・看護を含むヘルスケアにおいても、その利活用が強力に導入されていく動きについて、お話しする。

2つ目は、この動向を受けて、看護もイノベーションの創出に社会的に寄与しなければならないという自らの思いを動機として、この数年挑戦している企業とのコラボレーション研究について紹介する。すなわち、テクノロジー機器を用いて対象の状態を連続的に計測し、その情報を基に看護師がアセスメントして、介入しているPDCAサイクルを捉えて、その解析結果をエビデンスとして、最適なケア提供を提案するツール開発を目指す「看工連携研究」について、2017-2020年に企業と初めて行った最初の研究と、2021年から現在展開している2つめの研究について、それぞれの取り組みを、苦労や工夫を含めて紹介する。

3つ目は、同じく人口減少が進み、財源が限られる社会背景を受けて、ITを含む科学技術の活用を医療・看護・介護領域で推進するという政策方針から、ビッグデータ活用を看護でも進めていかないといけないという自らの動機をもとに、現在、厚労科研費の助成を受けて展開している「産官学連携研究」について紹介する。すなわち、この研究では、国や県から提供されたレセプトデータを用いて、どのような特性を持つ患者に対して、看護を含む医療・介護サービスのうちのどのサービスが、どのタイミングで、どのような頻度で提供されることで、アウトカムとなる再入院を防いだり、医療・介護コストが抑えられたりするのかについてAI解析し、その結果をエビデンスとした患者特性別の最適ケアパッケージの提案・開発を目指しており、その取り組みについて紹介する。

以上の3つについてお聞きいただき、高知女子大学看護学会にご参加の皆様との質疑や意見交換を通して、今後の看護におけるイノベーションの創出について、それぞれが考えるきっかけの場となれたらと願う。

【講師略歴】

1993 年東京大学医学部保健学科卒業（看護師・保健師資格取得）、2000 年東京大学にて博士号取得。

同大学病院勤務、米国ワシントン大学留学、厚生労働省看護系技官、日本赤十字看護大学教授、大阪大学教授を経て 2020 年より現職。

2022 年より、日本看護系大学協議会理事、同国際交流委員会委員長。

厚生労働省社会保障審議会専門委員（介護給付費分科会介護報酬改定検証研究委員会）等、毎年、厚生労働省の訪問看護や介護サービス関連の調査研究事業の委員長を複数担当するなど、複数の学術研究、政策研究、産学連携研究に従事。

ワークショップ 1

社会的課題への看護職の挑戦 ―ヤングケアラーの支援―

話題提供者：岩井 由里（高知県立幡多農業高等学校 養護教諭）

西内 章（高知県立大学社会福祉学部 教授）

森下 幸子（高知県立大学看護学部 准教授）

コーディネーター：森下 幸子（高知県立大学看護学部 准教授/

ヤングケアラープロジェクトチームリーダー）

近年、社会的課題は多様化・複雑化しており、その解決には既成概念や従来の枠組みにとらわれない「新機軸」の、すなわちイノベティブな発想や対策が必要です。このワークショップでは、少子高齢化、人口減少、核家族化の進展によって、社会全体の課題として注目されているヤングケアラー（本来大人が担うと想定される家事や家族の世話などを日常的に行っている18歳未満の子ども）の支援を取り上げ、3名の方の話題提供をもとに、イノベティブなケアをいかにして創出していくか、そのなかで看護職がどのような挑戦ができるかを考えます。

岩井由里さんには、高等学校の養護教諭としての経験を踏まえ、ケアを担う子どもや家庭への支援の実際と養護教諭の役割、支援における教育機関と関係機関や地域等との連携の現状や課題などについてお話しいただきます。

西内章さんには、保健医療福祉及び教育分野のソーシャルワーク実践の教育研究者、そして高知県の教育現場のスクールソーシャルワーカー（SSW）の育成や相談に取り組んでおられる立場から、ヤングケアラーの支援におけるSSWの活動の実際、子どもを取り巻く学校・地域の専門職との連携などに焦点を当てて、お話しいただきます。

また、森下幸子さんからは、家族看護の視点から、ケアを担う子どもとその家族の家族レジリエンス支援の可能性について話題提供いただきます。

社会全体で取り組むべき課題であるヤングケアラーとその家族への支援には、専門職の枠を超えて重層的、継続的支援が求められていますが、看護だからこそ見えるもの、行える支援があるはずです。看護の専門性を活かした小さな挑戦が、社会的課題の解決に向けた革新的取り組み（ソーシャルイノベーション）につながる可能性を秘めています。社会的課題に看護職としてどのように向き合っていくか、ご参加の皆様とディスカッションを通して考えていきたいと思います。

ワークショップ 2

変化する医療現場で専門性を発揮する看護職の挑戦

話題提供者：宮脇 聡子（四国がんセンター がん看護専門看護師）

大麻 康之（高知医療センター 救急外来・中央診療 看護副科長）

コーディネーター：豊田 邦江（高知県立大学看護学部 特任講師）

このワークショップでは、二人の看護スペシャリストから、変化を続ける医療現場の最前線でどのように看護イノベーションに挑戦しているのか、話題提供していただきます。

宮脇聡子さんは、現在がん看護専門看護師として四国がんセンターのがんゲノム医療センターで活躍されています。宮脇さんは、遺伝による影響が5～10%あるとされる乳がん患者さんへの看護に長く携わっており、その間に学んだ遺伝診療や看護の知識が今に生かされているそうです。また、世界的にがんゲノム医療が急速発展する中、看護が担うべき役割の明確化についても課題を感じているそうです。当日は、遺伝診療およびがんゲノム医療における看護を新たに構築すべく、看護職員への教育や関係職種とのコラボレーション、看護管理者へのアプローチなど、これまでの取り組みについて話題提供してください。

大麻康之さんは、高知医療センターの救急外来・中央診療で救急看護認定看護師として、外来救急の現場で活躍されています。大麻さんは、救急搬送されたものの入院せずに帰宅する患者さんに対し、“帰宅後も安心して生活ができるための帰宅時支援の取り組み”を行っています。患者の高齢化や地域包括ケアの推進が叫ばれる中、ずっと気になっていた帰宅者支援の問題に、あえて目を向けたそうです。「やり方がわからない」から「やってみたら手ごたえを感じた」に変化してきたこれまでの取り組みや、医療・看護職の意識改革など今後の課題などについても話題提供してください。

日々変化する医療現場の中、専門性を発揮する看護師だからこそ気づいた課題の認識と、変革者としての意識の高さに基づく実践を学ぶ場になればと思います。

ワークショップ3

越境する研究者が切り開く新たな看護研究方法の可能性

話題提供者：小林 秀行（高知県立大学看護学部 准教授）

岩本 幸大（京都大学大学院 情報学研究科 社会情報学コース
医療情報学講座 博士後期課程）

コーディネーター：畦地 博子（高知県立大学看護学部 教授）

このワークショップのテーマは『越境』です。昨年（2019年）の第48回学会講演で、東京情報大学教授松下博宣先生は「イノベーションというのは自由闊達なコラボレーションや、アイデアの異界越境から生まれる」と話されました。このワークショップは、看護・看護学という世界で育ち、研究者として異界（他領域）へ『越境』したふたりの研究者をお招きし、今後の看護研究について語ろうと企画されたものです。

話題提供者の岩本幸大さんは高知県立大学を卒業後ICUの看護師として働きました。その後、高知県立大学看護学研究科博士前期課程に進学した岩本さんは、AIを使った研究を行い、目覚めて、現在、京都大学大学院情報学研究科社会情報学コース医療情報学講座博士後期課程で学ぶ研究者です。もう一人の話題提供者、小林秀行さんは、東京大学で公衆衛生学を学び、看護師・看護教員などの経験を経て、スウェーデンのウメオ大学で修士号を取得、その後一橋大学の大学院経済学研究科で学んだ研究者です。現在、小林さんは、経済学の世界で出会った“ケイパビリティ”というとても魅力的な概念を看護にとりいれ活動を展開されています。

このワークショップでは、『越境』したふたりだからこそ見える看護研究の限界と可能性について語っていただいたうえで、看護研究におけるイノベーションについて皆さんと一緒に考えていければと思っています。

ワークショップ4

ソリューション導入で実現する学習者主体の看護教育

話題提供者：大川 宣容（高知県立大学看護学部 教授）

嶋岡 暢希（高知県立大学看護学部 准教授）

コーディネーター：長戸 和子（高知県立大学看護学部 教授）

森本 紗磨美（高知県立大学看護学部 助教）

近年、「ソリューション」という言葉をよく目にします。「ソリューション:solution」は、効果的かつ効率的に問題を解決することを目指し、状況や目的に応じて柔軟に適用されるものであり、効果的なソリューションは、問題の根本原因に対処し、持続可能な成果をもたらすとされています。つまり、ソリューションは、単に目の前の課題を解決するだけでなく、将来的な展望を持って課題解決の先にイノベーションをもたらすべく適用する方法やツールであると考えられます。

一方、看護専門職者として求められる看護実践能力の育成には、実習は欠かせません。学内実習では、基本的な手順や原則を学ぶことはできても、医療現場のリアリティを再現することには限界があります。また、臨地実習においても、医療の高度化や患者の重症化、患者の安全面や倫理的側面への配慮の必要性などの背景から、学生が実際に経験できることは限られています。さらにこの数年間は、COVID-19の影響によって、臨地実習そのものを行えない状況も生じました。このような状況の中で、学生の看護実践能力の修得を可能にする方法のひとつとしてシミュレーション教育が取り入れられるようになりましたが、それを効果的に管理するソリューションが提案され、看護教育に導入されています。

本ワークショップでは、学生の知識と現象とを統合する思考力の強化と自律的学習の促進を目指して、ソリューション導入によるシミュレーション教育に取り組んでいる先生方から、導入に至った経緯や、具体的な活用事例とその成果、今後の課題などについてお話しいただきます。その後、参加者の皆様と、教育における課題とソリューションの活用可能性や課題などについてディスカッションを行いたいと考えています。

ワークショップ5

“あったらいいな”から始まる療養生活を支えるケアツール開発

話題提供者：山本 典子（株式会社メディディア医療デザイン研究所
代表取締役）

中井 寿雄（高知県立大学看護学部 准教授）

コーディネーター：瓜生 浩子（高知県立大学看護学部 教授）

イノベーションは自由闊達なアイディアから始まり、その種は私たちが日常出会う何気ない現象の中に隠れています。身近なヒントからひらめいた“こんなものがあったらいいな”という小さな思いつきが、困りごとの解決や多くの人の便益につながる新たなモノを生み出す可能性を秘めているのです。このワークショップでは、臨床や在宅療養の場にある課題や要望をキャッチし、“こんなものがあったらいいな”というひらめきをケア物品やシステムの開発に繋げておられる方から、開発の経緯や取り組み、その面白さや苦勞などをご紹介いただき、いかにして身近なアイディアをカタチにしていくかをご参加の皆様と考えます。

話題提供者の山本典子さんは、看護師として働いていた臨床で感じた課題をきっかけに、その解決のために自分で製品開発にチャレンジされました。自分で会社を設立し、資金を調達し、試行錯誤しながら製作に取り組み、そうして出来上がった医療用テープカッターは院内感染の予防や処置効率、安全などに役立っています。その後も、看護師の目線を活かして、医療者だけでなく患者さんにとっても使い易く癒される商品開発を続けておられます。

中井寿雄さんは、医療的ケアが日常的に必要な障害者等を災害から守るシステムの開発に取り組んでおられます。スマートフォンの専用アプリに本人が使う薬や人工呼吸器などの情報を登録、自治体は情報を災害時の支援や防災対策に活用できるということです。病院で看護師や居宅介護事業所の管理者として働いていた時に、非常時の備えの必要性を実感した経験から、研究者の道を志し、この研究へと辿り着かれました。

このように経験から得たひらめきをアイディアに昇華させることや、アイディアを具現化していくことは、簡単なことではないでしょう。それを推進し、成し遂げていく原動力はどのようにして生み出されるのか、それを皆様と探究できたらと考えています。

ワークショップ 6

キャリア形成における自分イノベーション

話題提供者：坂口 結映（高知県立大学大学院看護学研究科 博士前期課程）

中村 夏子（高知大学医学部附属病院 次世代医療創造センター）

竹崎 陽子（高知医療センター）

松澤 大二郎（高知市保健所 健康増進課）

コーディネーター：田井 雅子（高知県立大学看護学部 教授）

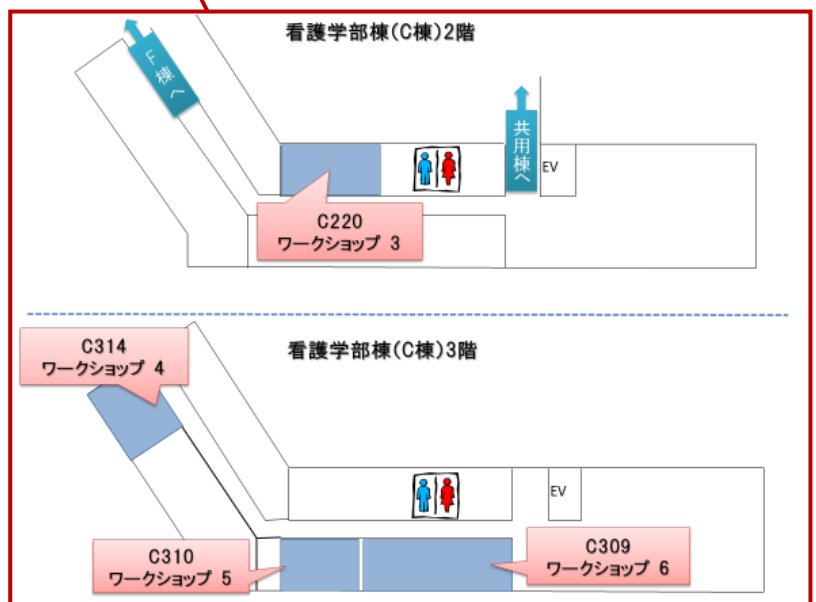
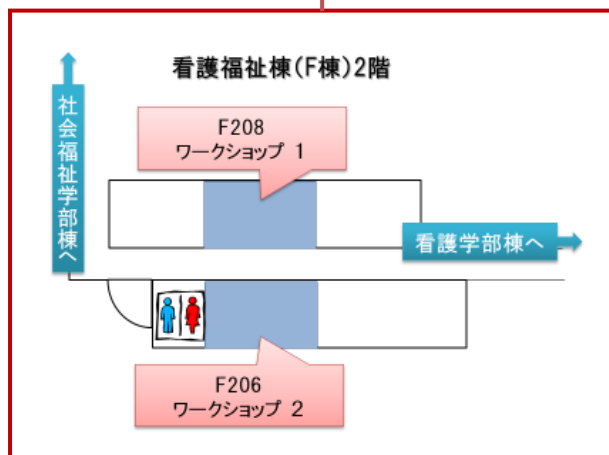
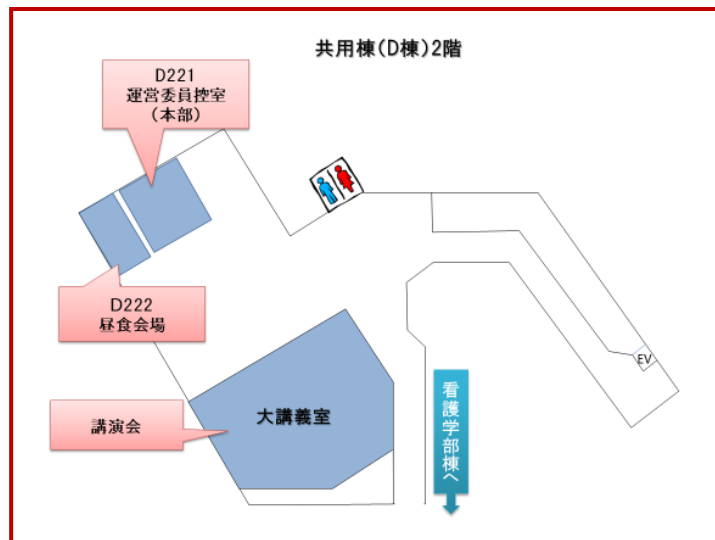
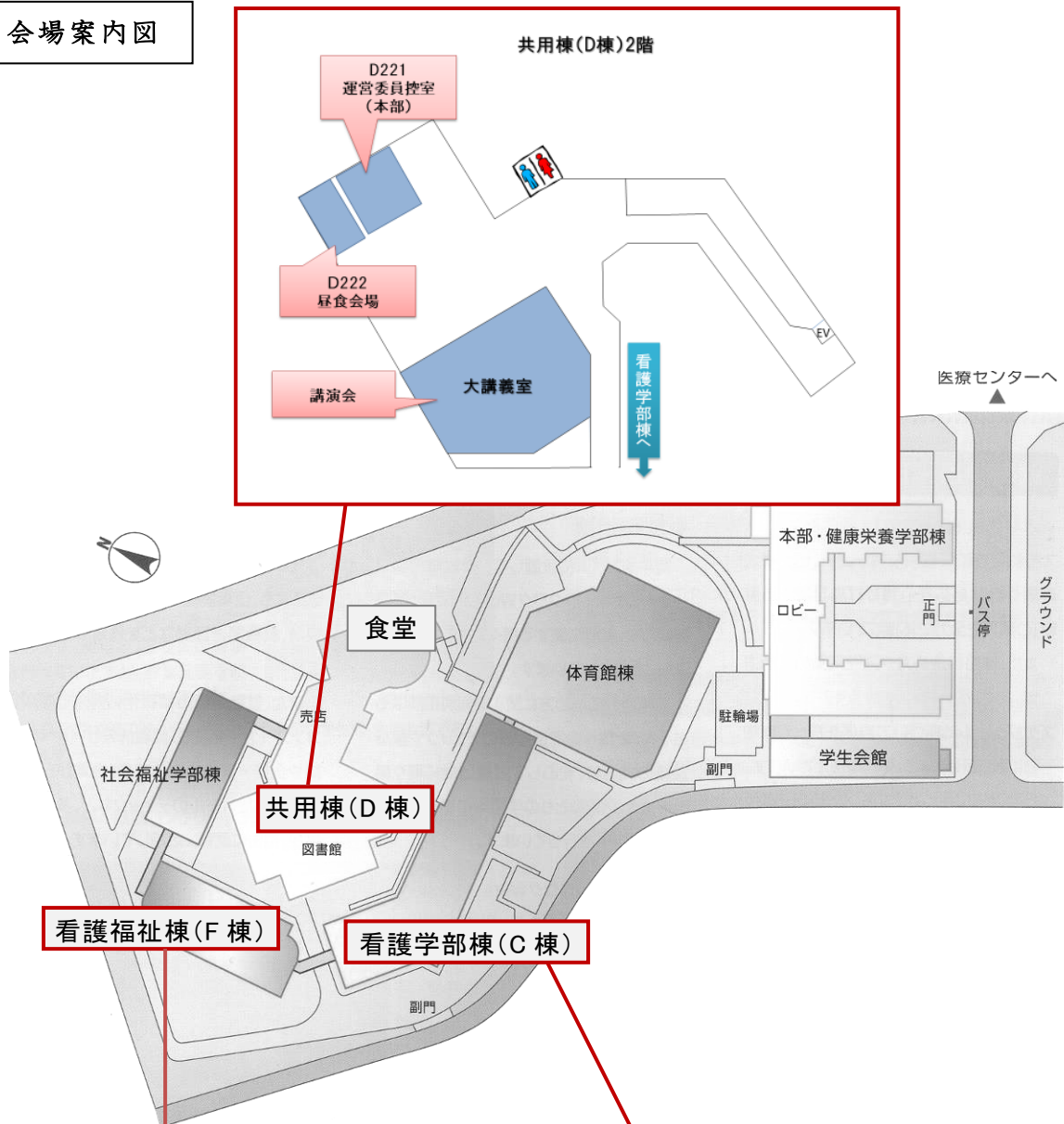
本ワークショップでは、4名の看護職者に、ご自身のキャリア形成を自分イノベーションの視点から話題提供いただきます。どのような出来事や、人や場との出会い、日々の看護実践が自分イノベーションのきっかけとなったのか、これからの自分イノベーションをどのように考えているのかなど、ご自身の体験を通してお話しいたします。

坂口結映さんは、本学卒業後、助産師として勤務した後、青年海外協力隊での活動を経て、保健福祉センターで助産師と保健師の資格を活かしてこられました。現在は大学院博士前期課程の学生として看護を探究しています。中村夏子さんは、急性期病院で看護師として勤務した後、大学院博士前期課程に進学し、修了後は臨床研究の支援者として活動する道を選ばれました。竹崎陽子さんは県内外で看護師をされ、急性期病院でWOCの認定看護師として長らく活躍してこられました。大学院博士前期課程のCNSコースを修了し、現在は外来で勤務されています。松澤大二郎さんは、本学看護学部の男子学生1期生で、急性期病院で看護師として勤務した後、保健所で保健師として活動する道に進みました。このように様々なキャリアを持つ4名から、多彩な自分イノベーションをご紹介いただけることと思います。

ご参加の皆様も、様々な出会いや機会、日常のケアの積み重ねによって、自身が思いがけない方向に導かれ、新たな挑戦につながるなど、自分イノベーションを経験しているのではないのでしょうか。4名の話題提供をきっかけにして、参加者の皆様と自分イノベーションについて、自分イノベーションが看護イノベーションにつながることを、一緒に考える機会を持ちたいと思います。皆様のご参加お待ちしております。

memo

会場案内図



高知女子大学看護学会



(連絡先)

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部内

FAX : 088-847-5524

E-mail : kwuaonaddress@cc.u-kochi.ac.jp

高知女子大学看護学会ホームページ <https://www.u-kochi.ac.jp/~nsgakkai/>

facebook <https://www.facebook.com/nsgakkai>